

五. 学校生活について（その1）

学校生活についてはどうだったのでしょうか。

体育（運動）関係について以下のように語られています。

久留島：「筒袖時代の頃女子にも水泳をとはじめましたが娘を裸にするとはと猛烈な抗議があったので元安川の下の魚市場の附近に学校の幔幕を河の中に張って泳がした。これが近県女子水泳の草分けでしょう。薙刀もお転婆をつくると叱られたのを押し切って始めた。雨天体操場は大正2年出来ましたが文部省から女学校には大きすぎると叱られたのを斎藤校長が日本一が何故悪いかと頑張ったと言う話を聞きました。」



写真1: 薙刀演武会

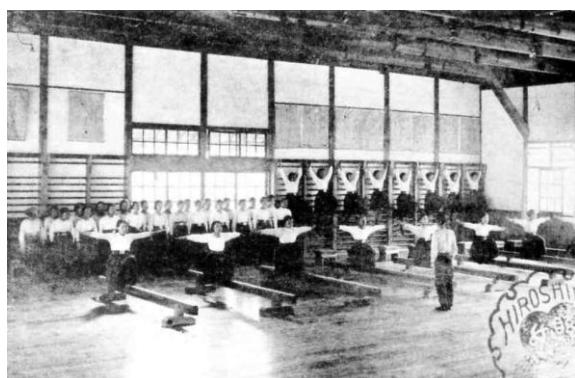


写真2: 体操の時間

写真1、2出典：『皆実有朋九十年史』1991年

築瀬：「斎藤校長はまた身体も丈夫にという主義で運動しては大食させた。健全なる身体は健全なる精神に宿ると修身のときよく話した。嘉納治五郎氏に額を書いて貰って雨天体操場にかけてあった。色の黒いよく食う大黒脚の女学生というのが定評だった。」

たもと付きの袖でも筒袖でもどちらでも自由に選べた衣服ですが、明治38年（1905年）、斎藤校長はできるだけ筒袖を着用するように指導しています。（参考：『皆実有朋百周年記念誌』平成13年（2001年））また袴は必ずはくようにと定めました。



写真3：筒袖、袴の生徒たち

出典：『皆実有朋九十年史』

斎藤校長は体育系の教育にも大変熱心で雨天体操場では鉄アレー、棍棒体操、跳び箱などが盛んにおこなわれました。なかでも棍棒体操は当時高師の男子のみが行っていたのですが、県女の生徒たちが運動会で披露するのを見てとても驚いていたようです。(参考:『皆実有朋百周年記念誌』)

県女の生徒は全国平均と比べて体格が良く「『日本一』の体格を作つて大威張りをしました。」とのちに斎藤校長は語っています。また斎藤校長は「ブラック・ダイヤモンドと云うて顔の黒いこと、手足の黒いことをほこったのは愉快でした。」とも述べています。

「大黒脚」とありますが「県女の大根足」は有名だったようなのできつと「大根足」のことだろうと推測します。

年令	本校平均		
	身長 (cm)	体重 (kg)	胸囲 (cm)
13 年	144.4 (138.0)	35.7 (32.5)	69.3 (65.1)
14 年	141.3 (141.3)	37.4 (36.9)	68.9 (67.9)
15 年	144.1 (144.2)	49.7 (39.7)	79.0 (70.3)
16 年	146.0 (145.9)	43.8 (42.4)	73.6 (72.8)
17 年	145.9 (146.7)	45.0 (43.9)	74.6 (73.8)
18 年	148.3 (147.1)	45.3 (45.4)	76.5 (75.4)

表1：本校生徒と全国高女の体格表

明治38年(1905年)

()は全国高等女学校の平均

出典:『皆実有朋九十年史』



写真4：砲玉投

出典:『皆実有朋九十年史』

当時の教育方針はというと「訓育中心主義で無言、親切、辛抱この三つが教訓だった。」ということで、このことについて以下のように語られています。

築瀬：「当時の教育方針は訓育中心主義で無言、親切、辛抱この三つが教訓だった。これは校長の松陰研究から来たらしい。松陰の妹さんの児玉芳子（もと千代子）さんも東京に訪ねて家訓や躰など色々ときかれた。あの当時82才のお婆さんは松陰五十年祭に萩に下られる途中松陰にあやからせてもらうために本校でお話しして戴いた。」

談話会や意見発表については以下のように語られています。

築瀬：「運動奨励と同時に学芸会や談話会も盛んだった。女学校の談話会も最初だった。女に弁論の自由は不要と抗議が出た。意見発表入学の感想などなかなか面白かった。斎藤校長は率先新教育をやったものだ。」また以下のようにも語られています。

久留島：「談話会の順序は入学当時クジビキできめて在校中一度は必ずやったものです。」

服装について制服が洋服になった経緯については以下の通りです。

久留島：「洋服が制服になった経緯はこうですね。雨天体操場が出来て体操陣が整備された。体操の時は体操袴通称ダンブクロという義絆のようにきかえた。これからバンドがいるようになりついで体操服をふだんに着るようになりそれが洋服に変ったのでした。当時は東京女高師の外洋服を着ていなかった時で大攻撃をうけたものです。大正7、8年です。下は霜降りの義絆、上衣も霜降りのセーラーのだぶだぶで今から見ると野暮臭いものでした。町を歩くと職工が来た来たとひやかされる。だから旅行にこれを着て行くことを生徒はとても嫌いました。」



写真5：体操服

大正2年（1913年）（11期生より体操服が制定された。水色木綿のモダンなものであった。
出典：『皆実有朋九十年史』



写真6: 大正10年（1921年）夏の制服



写真7: 制服

写真6、7出典：『皆実有朋九十年史』

義経袴とは普通の袴の裾に括紐をつけたものです。また、ここで語られているバンドとは制服についているベルトのことです。

築瀬：「大きな金具のついたバンドは大正4、5年頃から袴時代から初まつた。あの図案は私がやつた。岡先生が過渡期ですね。岡先生のして居られるそのバンドですよ。」

校章は大正9年（1920年）に制定されました。



写真8: ベルトのバックルについていた。



写真9: 校章入りのバックルを付けたベルト
制服以外にも袴の上にも着用した。

写真8、9出典：『皆実有朋百周年記念誌』

生徒たちは自主的に会合を行い自治活動を行っていました。

久留島：「また生徒自治の気風も早くから確立していました。最上級の4年生が自動的に会合して年に1、2回校風樹立のため級会を開きました。一切先生の指導はいりませんでした。普通2学期中に級会日誌をつくり全員連名墨で厳かにかいたものを校長先生に提出しました。その残している級会日誌によって卒業期生の腕があるなしが問われたものです。明治41年から始まったと思います。」

昼食後の休憩時間についてはどうだったのでしょうか。

久留島：「雨天体操場で「カドリール」をやったり鬼ごっこをやったり先生と生徒と一緒に楽しい一時を過ごしたものでした。」

「カドリール」とは社交舞踊の一種です。授業では時に厳しく指導する先生も休憩時間ともなれば生徒たちと楽しく交流していたようです。